

Ⅳ 中学校 一人一人を生かす個別最適な学びの実現に向けて

1 はじめに

令和5年6月に閣議決定された第4期教育振興基本計画（以下、「振興基本計画」と言う。）は、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を主要コンセプトとして、基本施策と具体的な指標を示している。ここでは教育が目指すべき方向性を、ウェルビーイングという新たな用語を用いることで、幸せや生きがいといった個人が実感として感じ取る価値意識のみならず、他者との関係性を通して社会全体を包括し循環しながら実現を目指していくより広義な価値として捉えている。それはマズローの欲求5段階説で最上位とされる「自己実現」をさらに越えた、言わば「自己超越」とでも言うべき個人と社会がより高い次元で融合し一体化した理想の姿と言えよう。

目指す方向性がそのように示されていても、それを実現する基盤は個人の自己実現と協働性の確立にある。従って、令和の日本型学校教育の答申で提言され、振興基本計画でも目標「確かな学力の育成等」の基本施策に位置付けられている「個別最適な学びと協働的な学びの一体的充実」が、ウェルビーイングの実現に向けての極めて重要な要素であり、学校教育にその基礎の形成が強く期待されていると考えられる。

一方で、本調査研究が目指す「共生社会の実現」については、「誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」が振興基本計画の基本方針に示されている。そして、「子供が抱える困難が多様化・複雑化する中で、個別最適・協働的学びの一体的充実やインクルーシブ教育システムの推進による多様な教育ニーズへの対応」の重要性を指摘している。インクルーシブ教育を実現していくためには、集団形成の質的变化が重要であり、そのためには教育に関する視点の転換や環境整備の課題等の多岐に渡る取組が求められる。その重要性は言うまでもないが、ここでは、今回、共生社会の実現に向けた具体的な視点として副題とした「一人一人を生かした教育」について、個別最適な学びの重要性に焦点を当て、小・中学校が連携して取組んだ実践的な研究の事例を紹介し、以下、考察を進めていきたい。

2 9年間を見通した一人一人の子供を生かす母島の実践

ここで紹介する事例は、小笠原村立母島小・中学校の研究の取組である。母島は東京都の南端に位置しており、本校は1学年10人未満の小規模校である。島内にただ1校の小・中学校併設校であるが、児童と生徒は同一校舎で学び、職員室も小・中学校で共有されていることから、環境的には小・中一貫校とも考えられる。その母島で小・中学校の教員が一体となって進めているのが本研究である。研究主題を「自分の考えや思いを相手に伝えるように表現できる母島っ子」として、令和5・6年度の2年間にわたる研究を進めており、本年がその初年度に当たる。

母島の子供たちは、島内に高等学校がないため、中学を卒業するとほぼ全員が故郷の島を離れることになる。そうした教育条件の中で、子供たちが生涯にわたって生きていく力を身に付けてくためには、9年間の学校生活でどのような力を育むことが大切か。その問いを出発点として、母島では小・中学校の教員が互いに母島の子供たちの強みと弱みを整理し、問

題点を協議しながら研究を進めた。そうして導き出されたのが、豊かな自然環境の中で伸び伸びと育ちながらも、学校生活での人間関係が狭い範囲に限定されており、多様な他者理解や努力して人に思いを伝える機会が少ないなど、環境や実態に基づく課題だった。その解決に向けた糸口を「児童・生徒の表現力を高める」という点に焦点化して研究主題とした。

その研究の取組から、ここでは小学校の「体育」と中学校の「美術」の授業について取り上げることにする。まず、「ア 実践の概要」として「個別最適な学び」の実現に必要とされる「学習の個性化」と「指導の個別化」の視点から事例を整理し、捉えていく。なお、実践には「協働的な学び」も取り入れられてはいるが、ここでは紙面の関係上、個別最適な学びに重点を置いて述べていきたい。

続いて、「イ 指導の工夫と成果」を分析していくことにする。ここで例示する2つの取組は、いずれも学習内容の定着を図る上で指導における「言葉」の意義を重視している点に留意しておきたい。従って、それぞれの取組における「言葉」の位置付けやその活用の在り方に着目し、それによる児童や生徒の変容を追いながら、その後の発展を含めた成果を検証し「一人一人を生かす教育」の実現に向けた指導の在り方について「ウ 考察」として示すことにする。

(1) 児童一人一人の主体的な学びを促す指導者の「言葉かけ」

ア 実践の概要

【学習の個性化の視点】

小学校5年、6年の体育科で、ねらいに応じて運動を行ったり、組み合わせたりして「体の動きを高める運動」の実践である。内容は「体の柔らかさ」「巧みな動き」「力強い動き」「動きを継続する能力」という4つのねらいをもった運動について複数のコースを設定し、児童が自分に合った運動を選択しながら主体的に運動能力を高めていく学習である。児童自身がそれぞれ自分の運動能力に応じて運動を選択して展開していく学習であり、児童が自己選択できる場面に授業に位置付けた「学習の個性化」を意図した学習活動と考えられる。

【指導の個別化の視点】

本授業を構想するにあたって、まず学習過程に「やってみる活動」を設定し、その活動を通して児童が感じ取った「問い（疑問）」を基に、一人一人が学習課題を見つけ出し、自力解決ができるように促す「言葉かけ」を教員が意識的に行うことで、見通しをもって意欲的に運動を選択し、活動する児童の育成を目指している。授業内でのこうした言葉かけは、小規模校の特性を生かして一人一人の児童の運動能力や実態に応じて、タイミングをとらえて意図的・計画的に行われており、「指導の個別化」の具体的な実践例である。

イ 指導の工夫と成果

本実践では、指導の場面で何気なく行われる指導者の言葉かけを分類、体系化し、「言葉かけ集」としてまとめ、意図したタイミングで的確に児童の支援ができるような工夫を行っている。指導の意図と具体的な言葉かけを整理した「言葉かけ集」は次のようなものである。

児童が「問い」をもち、学習課題を見出す

- ・ やってみてどうだった？ (運動との出会い、動きに対する問いをもつ)
- ・ 何を高めたいの？ (問いと学習課題の関係を知る)
- ・ 何が高まったと思う？

児童が「学び方」を知り、課題を解決しようとする

- ・ どうしたらできたの？ (ポイントを見つけながら動きを高める)
- ・ どんな工夫をすると高められるかな？ (動きを工夫しながら高める)
- ・ できるようになるポイントは何かな？ (ポイントを見つけながら動きを高める)
- ・ 何を高めるためにどんな工夫をしたの？ (動きを工夫しながら高める)

児童が学んだことを活用し、体の動きを高めようとする

- ・ 目標に向かって運動に取り組んでいるかな？ (目標に応じて選択した運動のポイントを意識したり、動きを工夫したりする)
- ・ さらに体の動きを高めるためにどんな工夫ができそう？ (動きを工夫し、ポイントを見つけながら高める)

児童の毎回の授業の振り返りには、表現の発信・受信が的確にできることからICT機器を活用し、「学習を通して分かったこと、気が付いたこと」「次の時間にどうしたいか」など、明確な視点に基づいた記述を求めている。それに対して、児童自身の考えを引き出し、選択を促すようなコメントを授業者が記載し、双方向のコミュニケーションを積み重ねていくことで、児童は具体性をもって自身の運動に対する見方を深め、運動を変化させようと意欲的に取り組む姿が記録から読み取れる。

次に示すのは、ある児童の第1時から第3時までの振り返りとそれに対する指導者のコメントである。

	児童の振り返り	授業者のコメント
第1時	今日は、ボールや縄跳びを使って運動をしました。ボールドリブルが難しかったです。次回は、ゴムひもくぐりなどの体の柔らかさを高める運動をしたいです。スクラックレールは結構うまくできました。	スクラックレールうまくできたと感じられて素晴らしいです！どんどんできることを増やしていきましょう。ゴムひもくぐりでは、どうすれば体が柔らかくなるか、動きを工夫してみましょう!!
第2時	今日は、前回やっていない運動をしました。どの運動で何が高まったか分かりました。スクラックレールは工夫をして、バランス力を高められたと思うので、これからも工夫をして、運動をしたいです。	スクラックレールはまっすぐだけでなく、形を変えることでより効果的に体の動きを高めることができそうですね。考えたことを実際に表現してみるのを大切にしていきましょう！

<p>第3時</p>	<p>今日は、巧みな動きを高める運動だけしました。チームでやったので、3人でできることを考えました。スラックでは、目をつぶったり後ろ向きでわたりました。後ろ向きで渡ったほうが、バランス力が高まると思います。ボールドリブルでは輪の数を減らしたり、広げたりしました。タイミングを合わせてドリブルをするのが難しかったです。長縄では、縄を短くして飛びました。長いときより疲れなくなることが分かりました。次回は、今回やらなかったことをやるので、たくさん工夫をしたいと思います。</p>	<p>後ろ向きで渡るとバランス力が高まると感じたようですね。どうしてでしょうか。次回みんなを考えてみましょう。ボールドリブルの工夫も見られました。周りの動きも見ながら、ボールをつくことができるようになってきましたね！素晴らしいです!!長なわで行っている跳び方を8の字跳びと言います。これは8が小さければ小さいほど速く回ることができる反面、大人数で効果的です。少人数でも有効かどうか、実際にやって確かめてみましょう!!</p>
------------	---	--

上記の第1時と第3時の記述を比較してみると、同じ児童とは思えないほど、記述内容が具体的となっており、運動の特性や工夫が細かくていねいに書かれていて、自らの運動を言語化することによる学びの深まりが感じ取れる。

ウ 事例の考察

児童が主体的に学習に取り組める環境づくりと一人一人の児童の取組に対する指導者の的確な言葉かけや助言を積み重ねることによって、児童は自らの学習、この場合には運動を意識的に捉えられるようになり、それを言語化しながら改善を試みることによって課題解決の手立てを学んでいる。一人一人が学びを確かなものとして実感し、達成したことへの自信が自己肯定感へと発展していく姿が感じ取れる。本校では、そうした変容の振り返りを言語化することで、自らの学習成果を自覚しながら、自信をもって思いや考えを発信できる児童を育成し表現力の向上へとつなげている。

ここで取り上げた小学校における「体の動きを高める運動」の学習は、中学の1年、2年でも継続して扱われ、3年生では「実生活に生かす運動の計画」へと発展していく。小笠原の母島中学校では、集団での学びの機能を生かすために体育の授業を1年から3年まで全校生徒が合同で行っている。学年に応じたねらいを設定し、異年齢の特性を生かした小グループで、自主的に自らの運動能力を高める工夫を考えながら進められており、小学校での取組を発展させた「学習の個性化」や「指導の個別化」が継続して展開されている。どんな取組も継続されてこそ力となって定着する。令和の日本型学校教育では「9年間を見通した義務教育の在り方」が提言されているが、その背景には、このような学びの連続性や継続性が、子供たちの可能性を開花させる上で極めて重要であることの認識があるものと考えられる。

(2) 一人一人の発信力、表現力を高める「豊かな語彙の習得」

ア 実践の概要

【学習の個性化の視点】

中学校の事例は、2年生の「母島育ちの自分」というイメージポスターの制作である。

教科の「見方・考え方」に示されているとおり、美術科の学びの本質は生徒自身が「自分

としての意味や価値をつくりだすこと。」にある。従って、「学習の個性化」は美術科そのものの特性と考えられる。地域を教材化したこのポスターも、題材は共通であっても1学年7名の生徒がそれぞれ「麗らかな波」「白亜紀に行って釣りしたい!」「まっすぐ」など自分としてのテーマを設定し、母島の海と自分との関わりを追求しながら制作が進められていた。

【指導の個別化の視点】

本授業は、制作の中間段階に発表会を位置付け、生徒が自分の表現したい意図や制作過程での問題点を発表して、それに対する助言を他の生徒から受けるというものである。テーマが個別であることから、描く形や色彩、構図や構成、文字の書体や描く画材など、表現の全てを生徒の意図に沿って選ばせており、表現方法にも何ら制約を設けていない。制作の中間に位置付けた発表会は単なる相互鑑賞の時間ではない。自分の作品を見つめ直し、他者の工夫に触れることで、自らの制作上の課題を深く捉えて、解決に向かう手立てを考えるための仕掛けである。その仕掛け自体が「学習と指導の個別化」を成立させる学びの要となっている。

イ 指導の工夫と成果

本題材で、指導者は作品の制作自体に条件等を設けていないが、発表の際には生徒から言葉を引き出すさまざまな工夫をしている。例えば、作品に用いる思いを込めた色、小笠原の海の青に「メソアメリカブルー」「エンシェントブルー」「水天平和色」など、生徒自身が考えた独自の色名をつけて発表させていた。そうすることで生徒は自分の作品や表現を客観的、分析的に捉えていくことができるようになる。結果として、自分の作品を批評的に捉える態度が養われ、発表内容の充実につながっていた。

また、発表の際には、発表者も助言する生徒も、色相、明度、彩度、グラデーションやシンメトリーなど、美術に関する造形的な用語を的確に用いて、自他の作品についての感想や意見を述べ合っていた。この点からも、基礎的な学びを重視し、その上で生徒に既習の学習内容を活かしながら発表し、表現するよう指導している指導者の姿勢が感じ取れた。

次に示すのは発表を聞いた生徒が、素早く書き込んだ感想と助言である。その書き込みがすぐに共有できるのはICT機器の優れた点である。母島では小学校から多くの教科で振り返りにパソコンが活用されており、打ち込みや共有に慣れている様子が見て取れた。ここにも小・中が共通して取組む成果の一端を感じた。

	よいと感じたところ	私からのアドバイス
○○さんの作品	トーンの工夫をすることで、自分の性格を表現していると思った。写実的ではないけど、実際にある影を描いて現実の○○さんとファンタジーの中の○○さんが混ざり合っている雰囲気が出ていてよいと思った。	水彩画だと色が混ざってしまうと言っていたけれど、できるだけはみ出さないように描いて、もしはみ出して混ざってしまったとしても、ファンタジーならではの幻想的な雰囲気を表現できるのでいいと思った。

ウ 事例の考察

教科には学習を進める上で必要となる用語や語句がある。本事例は、それをきちんと習得し、正しく使うことで、考える次元をステップアップさせることができることを示している。学びは言語の獲得と活用を通して深まり、語彙の豊かさは学びの豊かさに比例する。知識を確実に習得させ、その活用場面を設定していくことで子供たちの思考や表現は深まっていく。

3 共生社会の実現に向けたまとめと提言

振興基本計画は、目指すウェルビーイングの要素として、自己肯定感、心身の健康、幸福感、協働性、社会貢献意識、多様性への理解などを挙げている。

ここで取り上げた小学校体育科と中学校美術科の実践から学べることは、指導者のきめ細かな授業への仕掛けと学びの振り返りによって、子供たちの言語が豊かになり、それが更なる学びの探究へと発展し、主体的な学習態度の形成や課題解決の意欲へと高まっていく姿である。そして、子供たちの言葉を引き出すためには、指導者が答えを語るのではなく、問いを生み出し、子供自身が自己選択、自力解決できるような示唆や励ましを、個々の子供たちの学習状況に応じて語りかけていく、そうした支援的な働きかけの重要性が示されている。

また、言葉は自らの活動や体験を振り返って価値付け、抽象化しながら整理して、概念形成を図るという機能をもっている。つまり、言語化することによってはじめて、経験は実感を伴う理解として深まり、意味や価値が生み出されることになる。教育が人と人との関わりの中で成立するものであることは不易な部分として今後も変わらない。その際に主たる媒介となるのは言葉である。一人一人が学びを通して習得する豊かな語彙と、それを活用することによって積み重ねられる確かな意味の獲得の過程で、個別最適な学びは実現するものではないだろうか。ここで紹介した2教科は、いずれも実技を伴う教科であるが、AIの進展とともに学習内容や生徒の学び自体が記号化される傾向が強まるなかで、デジタルとリアルの調和を図る面からも、音楽や美術、体育や技術・家庭など、体験を通して学ぶ教科の重要性を改めて指摘しておきたい。

母島の事例を通して、小・中学校に共通する課題として「個別最適な学び」の在り方を見てきたが、最後に、そこから学んだ次の2点を「共生社会の実現」に向けての重点として提言したい。

【一人一人を生かした教育の実現に向けての提言】

- ・教育における言葉の重要性を再確認し、一人一人の児童・生徒の学びを豊かにする働きかけや言葉かけについて、教育指導の重点として全校で意図的に取組み、実践していくこと。
- ・児童や生徒の多様化、複雑化に対応して、共感的な視点に立った言葉かけを重視しながら、一人一人の児童・生徒の望ましい変容を支えていく支援的な教育環境や仕掛けの充実を図り、個に応じた指導を校内で展開していくこと。